

私の  
職場  
komachi's  
point



右/デスクに向かう徳川。  
左/打ち合わせスペースの壁には進行中のプロジェクトのバースが貼られている。

**思いもよらない、父の問いかけ**  
東京都港区赤坂にある(株)安藤・間で意匠設計者として働く徳川恵梨には、かつて父から投げかけられ、自らに問い続けた忘れられない言葉がある。それは大学三年生の夏、いよいよ就職活動を始め、建築の世界へと歩みを進めるときのことだった。  
「家族で夕飯を食べているとき、父がいつになく真顔で、『本当に建築をやるのか』と聞いてきたんです。今まで進学先や卒業後の仕事について私に任せてくれて、何も言わなかったのに。初めて父と設計者という職業について真剣に話をしました」  
徳川の父親は神戸で設計事務所を営み、主に商業施設の設計をしていた。事務所は自宅から車で五分ほど、子どもの頃から徳川の遊び場になっていた。中学生、高校生へと成長するなかで足を運ぶ機会は減っていったが、父の仕事場での楽しい思い出は全く色あせることなく、建築の仕事に携わること、設計者になることが将来の進む道と信じて疑わなかった。  
「設計事務所の雰囲気が好きでした。大きな製図板が置かれ、テーブルには建物のカタチを考えるための模型がいくつもあって。本棚にびっしりと並んだ建築の本を開くと、かつこよくてきれいな写真ばかり。今でも鮮明に覚えています。小学校の卒業文集では『設計者になり

たい!』と書いていましたね。どんな仕事なのかちゃんと理解していませんでしたが(笑)。大学でも迷うことなく建築学科を選び、いざ設計者になるんだと決意を新たにしていたら、父から『建築は設計だけがすべてではない。もっと広い視野で考えてみたらどうだ』と言われ、本当に悩みました」  
**お客様の満足と私の満足**  
個人で設計事務所を経営し、建築の楽しさはもちろんのこと厳しさも知る父の一言は、まだ建築の世界の広がりや十分に見通していなかった徳川の胸に響き、あらためて建築と自分の関係を考えるきっかけになった。  
「でもやっぱり設計の仕事がしたくて。それじゃあ設計ができる会社ってなんだろうと探し始めました。そのうちに建物をつくることにも興味が出てきたんです。その両方があるのが、ゼネコンの設計部でした。『見つけた!』って思いましたね」  
二〇〇六年、徳川は(株)間組(現(株)安藤・間)に入社。本社の設計部で集合住宅のプロジェクトに携わりながら、設計のイロハを一から学び始めた。時間を忘れて仕事に没頭すること二年半、設計の基礎が身に付き、徐々に仕事への手応えや貢献も感じられるようになった頃、ある辞令が下される。九州支店の設計部への異動だ。  
「異動の話は驚きましたし、不安もありまし

輝け!

けんせつ小町

# 意匠設計者

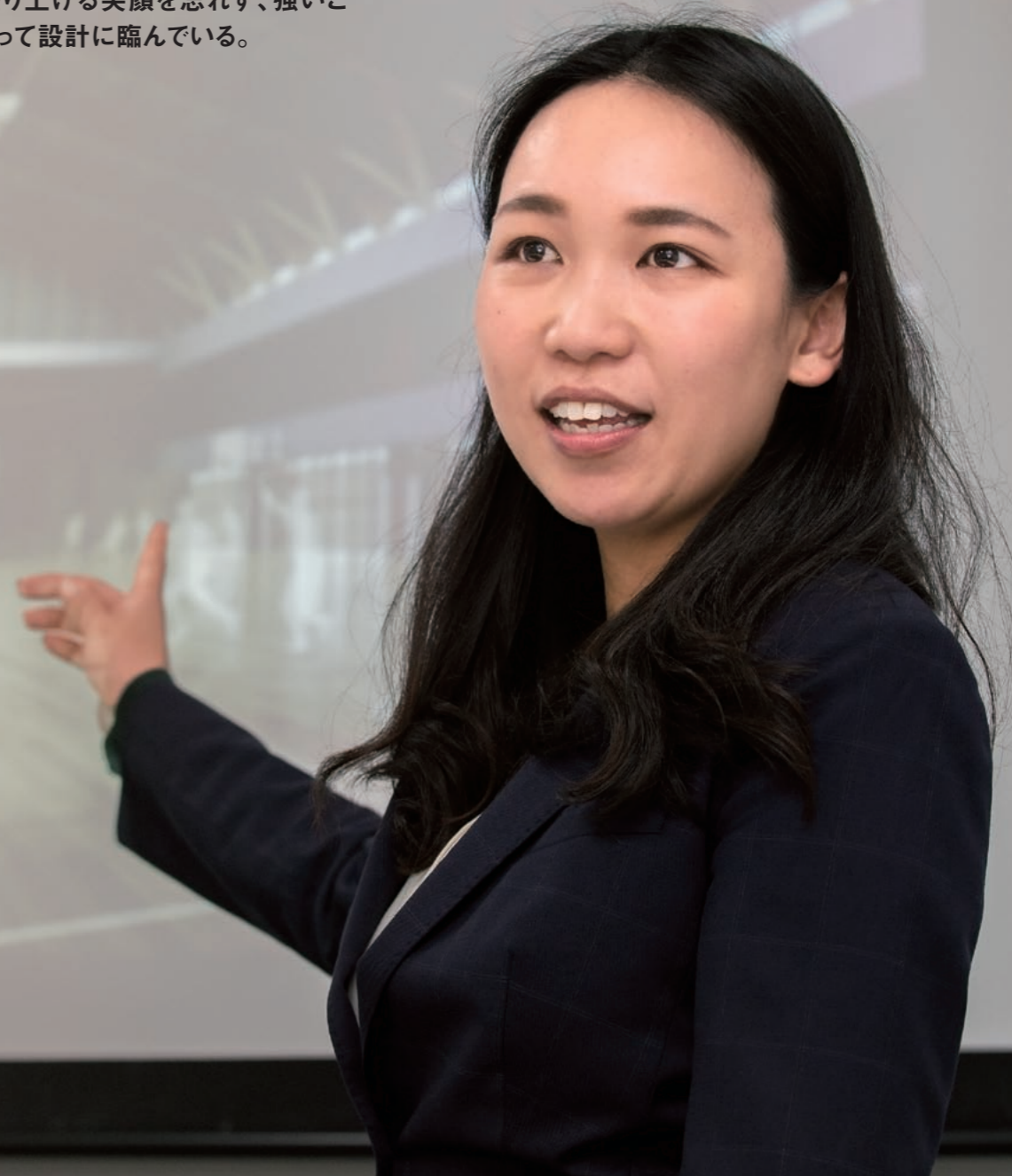
徳川恵梨

株安藤・間 建築事業本部  
設計統括部 意匠設計部 第五グループ



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。

小学生の頃から意匠設計者になることを夢見ていた。就職活動を始めたとき、父からの「建築をやるのか」という思わぬ一言に悩むが、その道に進んだ。本社や支店の設計部で様々な人と出会い、学び、成長した今は周りを盛り上げる笑顔を忘れず、強いこだわりを持って設計に臨んでいる。





「持ち前の明るさで、東京本社に来てすぐにグループのメンバーと馴染みましたね。後輩の面倒見もよく、姉御のような存在で頼りになります」  
(調グループリーダー：左)

## 「お客様の心をつかんで、離さない。 そんな設計者になりたい」

私の  
仲間  
komachi's  
point

「だが、いざ九州に行ってみたら『よしやるぞ!』と気持ち切り替えられましたね。私、いろんな変化に前向きなんです(笑)」

支店設計部のメンバーは本社に比べ少なく、おのずと受け持つ業務の幅も広がる。徳川はさらに高くなるハードルをどう乗り越えていった



上/九州支店設計部のみなさん。徳川の右隣が坂本室長。  
下/現在、徳川が担当している学校のパース。

のか。

「たしかにやることは増えましたね。最初は正直戸惑いました。そんなとき当時の上司だった坂本室長に『この仕事はお客様からいただいたお金で相手も自分も満足するものをつくっていくことが醍醐味だ』と言われたんです。お客様の満足と私の満足が重なるものをつくる。この言葉に奮い立ちました」

### 大胆に、繊細に、考えつくす

「坂本室長は自分の意見をしっかりと伝える方で、お客様の心をつかみ、ニーズを引き出すんです。すごく個性的なんですけど、つくった

建物のお客様はいつも満足されて。設計とはなんであるかを教えてくれた、師匠ですね」

発注者の主張を聞くだけではなく、プロとしての考え、想いを伝える。自分の胸中を明かすことで、信頼感が生まれ、本当にいいものができていく。徳川は坂本室長から仕事の技術だけではなく働き方も学んだ。

「意匠設計者の仕事はまず建物の大きな骨格をつくること。営業担当者と一緒にお客様と打ち合わせをして、その要望を構造設計者や設備設計者をはじめ、社内に展開していく役割です。建物のカタチを最初に決めることに、私はやりがいを感じています」

「何もないところから骨格をつくっていく。ときに大胆さも必要だろう。一方、設計者には細部を詰めていく繊細さも同時に求められる。」

「九州で社員寮の設計をしたときのことです。目地の納まりといった細かい部分まで、現場の所長と話し合いながら自分で決めていったことが、いい勉強になったんです。出来上がって一番嬉しかったことはきれいに納まった目地を見たときです。発注者の方は気づかないところかも知れませんが、自分が初めてこだわりをもつてつくったものだったので想い入れがあります」

発注者と現場の意見をまとめるながらも、自分のこだわりをカタチにすることができた徳川。慣れない環境で辛いことも多々あったが、ものづくりの醍醐味を肌で感じた仕事だった。

### komachi MEMO

「大学時代はアメリカンフットボール部のマネージャーをしていました。部員みんながものすごく練習熱心なので、私もめり込むようにクラブ活動に参加していました(笑)。いまでも休日はスポーツ観戦に行ったりします」



profile

とくがわ・えり◎1982(昭和57)年、兵庫県生まれ。工学部建築学科を卒業後、2006年4月に(株)間組(現(株)安藤・間)入社。集合住宅などの設計に2年半従事した後、九州支店に転勤する。九州で約8年間、社員寮やオフィス事務所をはじめとする様々な建物を設計し、2016年1月より本会社に戻り現在に至る。

現在担当している物件の進捗状況をプレゼンする徳川。自分の想いを全力で伝え、相手の意見を真摯に受け止める。

笑顔とこだわりが原動力

八年間の九州勤務を終え、大きく成長した徳川は、再び赤坂の本社で設計に打ち込んでいます。現在は医療・教育施設を手掛けるチームに所属しており、広島県の学校を担当している。

「木材を活かした学校です。広い空間が必要な体育館も木造で小屋組をつくっているんですよ。当社でも初めての挑戦。暗くなりが必要な体育館に自然の光をどう取り入れるか。特にこだわっています」

パースの説明をする徳川の顔は生き生きと輝いていた。徳川の採用担当であった社長室CSR推進部の出野課長はこう話す。

「彼女は、笑顔が絶えずその場を明るくする力があるんです。本社に戻ってきて久しぶりに話をしましたが、入社当初に思った印象といまも全く変わっていません。本人は気づいていないかもしれませんが、話しかけやすい雰囲気があり、しっかりしている。だから、上司は安心して仕事を任せられるし、後輩は困ったときに頼りにするんですね」

コミュニケーションを怠らず、チームとして仕事をする。徳川が仲間と楽しく仕事をしている姿が目に見え、他者を惹きつける柔らかな雰囲気と、自分の信念を貫くこだわりをもった徳川。「建築をやるのか」という問いへの答えがその表情に表れていた。